

私たちの活動や意見を仲間で共有します。
会費は県と日本平和委員会の活動も支えます。

土浦平和の会ニュース

2019年7月15日 第329号

発行：土浦平和の会

事務局：土浦市烏山2-530-296

HP：<http://heiwatutira.web.fc2.com/>

2019年 国民平和行進



国民平和行進2019 土浦コース(7月6日) “核なき世界”めざし、元気に行進

アン・スギルさん(韓国・女子大生)や国際青年リレーメンバーなど、青年の参加に希望

5月6日に北海道をはじめ各コースを出発した2019年国民平和行進は2ヶ月目の7月6日、いよいよ土浦市に到達。

亀城公園での歓迎集会のあと荒川沖駅までの10kmを元気よく行進しました。

亀城公園には行進者はじめ60名余が集まり、心づくしの昼食をとりながら、暖かくも決意に満ちた交流が行われました。

前準備・会場設営やおにぎり、お新香、スイカなどなどご用意いただいた皆様、大変お世話になりました。

亀城公園に到着直前の平和行進



心づくしの昼食風景



当日は雨という予報に心配しましたが、幸い曇天の“行進日和”となりました。

石岡→かすみがうら市と歩を進めてきた行進者が亀城公園に到着すると、出迎えの皆さんは大きな拍手と歓声で隊列を迎えました。

主催者や田子ゆうな市議、二見伸明さんなどの歓迎の挨拶、土浦市長のメッセージに続き通し行進者も元気に決意を語りまし

た。韓国の女子大生アン・スギルさんは大いに照れながらもアリランを熱唱しました。

国際青年リレー行進者や茨城自治労連、土浦協同病院の労働組合など医療関係の若い皆さんの参加も大きな希望を与えてくれました。もちろん超ベテラン、高齢者の奮闘にもおおいに励まされました。

1958年に始まった平和行進、8月6日まで広島、長崎をめざしてきょうも歩み続けています。

二見伸明元運輸大臣、戦争体験熱く語る



アリラン熱唱のアン・スギルさん



途中休憩スイカで水分補給し、後半行程スタート



夏の平和行事 盛りだくさん

2019原爆と人間展

ピースデー 8月10日(土)
 午前11時～午後4時
 県南生涯学習センター(土浦市役所5階)
 入場無料

午前の部
 トキメタリー映画
「はだしのゲンが伝えたいこと」
 その他、朗読など

午後の部
 アニメ映画 **「夏服の少女たち」**
 その他、中学生平和使節団報告など

原爆パネル展
8月6日～8月11日ピースデーと同フロア
 主催：原爆と人間展実行委員会、後援：土浦市、新聞各社他



8・15平和のつどい

映画**「明日へ」**—戦争は罪悪である—

日時：**8月15日(木)**

①10:00～ ②13:30～

会場：**亀城プラザ文化ホール**

入場料：前売券1000円(当日1300円)

ぼくに落語を教えてくれた和尚は、「戦争で、人殺しだけはするな」と言った。老いた落語家が語り継ぐ、叛骨の僧侶の言葉。

主催：「8・15平和のつどい」実行委員会
 後援：土浦市など7団体
 協力：茨城映画センター

「戦争体験集」発行される

(市立博物館が発行)

土浦市にゆかりのある人たちの戦争体験を集めた冊子「土浦の人と暮らしの戦中・戦後」が発行されました。市立博物館が4年がかりで、聞き取り調査でまとめたものです。冊子には、貴重な写真と共に、60人余りの体験談がつづられています。

「土浦平和の会」対市要望の実現

2017年4月、土浦平和の会は土浦市の平和行政についての(事前)要望に基づく懇談を行いました。その際に、「戦争の悲惨さ、平和の尊さを後世に伝える取り組み」として次のようなやり取りがありました。(会ニュースNo.302より)

★要望. 市の事業として市内在住の戦争体験者の記録集を編纂して下さい。

この要望に対しての市の回答は【博物館長】一昨年、戦後70年の節目にあたり、年々戦争体験者が減ってきていることを踏まえ、戦争体験の収集は今が最後のチャンスだとの思いで、5カ年計画で調査・収集・記録化を行うことにした。平成27年～28年度がアンケート、聞き取り等の調査、29年～30年度が収集した物を整理して記録化。後世に

土浦の戦争体験 後世に

「朝日新聞」6月3日付

市立博物館が冊子発行



戦争体験集を手にする野田礼子さん
 土浦市中央十丁の市立博物館

土浦市にゆかりのある人たちの戦争体験を集めた冊子「土浦の人と暮らしの戦中・戦後」を、同市中央十丁の市立博物館が発行した。戦争体験者が高齢化する中で聞き取り調査を進め、4年がかりでまとめた。同館は戦後70年を迎えた2015年、「これが最後の機会になるかもしれない」と考え、聞き取りを始めた。市の広報誌などで情報提供を呼びかけ、担当者が

が向いて話を聞いたほか、体験記を寄せられた人もいる。対象は戦中・戦後に土浦市に在住・在勤・在学していた人たち。現在は県外に住んでいる人も含め70～90代の60人余りの体験談を集めた。冊子には「勤労動員」「土浦への疎開」「従軍の体験」などのテーマに分けて収めている。冒頭は、今年2月に00歳で亡くなった歴史学者の直木孝次郎さん。戦争中の1943年、海軍予備学生として土浦海軍航空隊に入隊した。生前に奈良市の自宅でおこなったインタビューと併せて収録した。直木さんは、運命の歴史

勤労動員・疎開・従軍…60人余に聞き取り

をかえりみると、戦争の気運が高まると、平和論者は悪くいわれるようになることが多い。平和がよくなる戦争がわるいことを、国々の常識としたい」と記している。ほかにも土浦海軍航空隊への空襲、学徒動員中に受けた戦闘機の機銃掃射、シベリア抑留など、戦中から戦後の様々な経験が、つづられていく。野田礼子さんは「11歳の体験から、日常生活の中に戦争という非日常がいつの間にか入り込んでくる感じがする」と話している。A4判227ページ、税込み1600円。申し込みは市立博物館(0299・8224・2928)へ(各口番)

伝えるべく活用する。

今回の発行は、この回答の通りに実行されたものです。土浦平和の会の山口雪雄さんも寄稿者の一人になっています。冊子はA4版227ページ税込み1,600円、市立博物館で入手できます。

※手元に一冊ありますので、まわし読み希望者はお声かけください。(理事・大滝)

【平和の会へのおさそいを。「平和新聞」購読も広げましょう】

- 幅広い年代からの加入を勧めましょう。友人・知人などにお声かけを
- 「平和新聞」(毎月5、15、25日発行)月額400円



新たにビデオ収録したりして公開するところも検討する。